

ロールシャッハテストにおけるクロッパ―法の解釈

名島 潤慈

Some Remarks on Bruno Klopfer's Interpretation of Rorschach Test

NAJIMA Junji

(Received August 6, 2009)

キーワード：ロールシャッハテスト、解釈法、クロッパ―

はじめに

ロールシャッハテストの解釈法には種々のものがある。日本では片口法（片口, 1987）、エクスナー法（Exner, 2003）、名大法、阪大法などが盛んである。しかし、自我機能の質と様態を主として心理療法との関係で丹念に見ていくクロッパ―法には捨てがたいものがある。筆者自身は修士論文（名島, 1974）において Bruno Klopfer（1900-1971）が考案した RPRS（Rorschach Prognostic Rating Scale）を用いたこともあつて、クロッパ―法になじんでいる。片口法に比べるとクロッパ―法はスコアリングが複雑であり、解釈も複雑となっている。解釈の基盤も少し異なっている。テストの施行法も、片口法では自由反応段階と質疑段階と限界吟味段階であるが、クロッパ―法ではこれら以外に、類推段階が設けられている（類推段階での結果は付加分類として扱い、限界吟味段階での結果はスコアリングには含めない）。

クロッパ―法におけるスコアリング上の留意点については以前にまとめたことがあるので（名島ら, 2000）、本稿では解釈上の留意点についてまとめる。そのさい、主として思考障害・色彩障害・濃淡障害に焦点をあてたい。なお、クロッパ―法の形態水準評定は5.0から-2.0までの15段階という細かい数値で表示されるのであるが、本稿では煩雑さを避けるため数値は省略する（ただし数値がマイナスの場合には、主決定因の後ろにFC-といった具合にマイナス記号を付す）。主要文献は、Klopfer *et al.*（1954）による *Developments in the Rorschach Technique Vol. 1*、Klopfer *et al.*（1962）による *The Rorschach Technique Vol. 2*、Klopfer & Davidson（1962）による *The Rorschach Technique: An introductory manual*、河合（1969）による『臨床場面におけるロールシャッハ法』などである。以下、インクプロットはプロットと略す。反応領域はクロッパ―法の領域指定に従う。反応例はもっぱら Klopfer らのものを用いるが、一部筆者が施行したのものを用いる。

1. 解釈上の留意点—思考障害を中心として

(1) 「圧縮反応」(condensation)はRorschachの言う混交反応(contamination)に相当する。幼児や統合失調症に生じやすい(アメリカの幼児では7、8歳に最もよく生じる)。2つないしそれ以上の概念を一緒にするもので、検査協力者本人は別々のものであると思っていない。形と色の圧縮が多い。Klopferらから例を引けば、カードIXの緑(D1)の部分を、grass-bearと反応する。緑色の草の部分が同時に熊の形態を有していることから「草熊」となったもの。カードIIではD1のapple-windowが典型的。つまり、丸いから窓、赤いからリンゴで、この2つが圧縮され、最終的に「リンゴ窓」となったものである。ちなみに、混交される要素の1つが色彩の場合、この圧縮反応は「色彩混交」(color contamination)とも呼ばれる。

(2) 「転位反応」(transposition)は非常に少ない。もしも出れば、妄想型統合失調症の可能性がある。その他、緊張型統合失調症や境界統合失調症(borderline schizophrenia)など。転位反応の例としては、カードIIIの下部D3の黒色部の「チョウ」(真ん中のD1の赤色のチョウ概念を転位)や、カードXの上部D13の緑色部の「イモムシ」(下部の緑色部D5のイモムシをD13に転位)。転位は、他者にとって明白な現象に対する統合失調症者の側の不信感(distrust)を示すとされている。

(3) 「固執反応」(perseveration)には以下のような3つのものがある。

①「魔法の杖固執」(magic-wand perseveration)は幼児によく見られるもの。時折、退行のひどい統合失調症にも見られる。投映された対象の形とプロットの形との間に何の一致もないような反応を繰り返すものであり、現実吟味力の未発達状態を示す。統合失調症の場合には、退行の深さを示す。

②「固定観念固執」(fixed-idea perseveration)は障害のひどい統合失調症において、①よりもより普通に見られる。最初の反応とプロットとの一致はかなり正確であるが、それ以後のカードにおける反応(最初の反応と同じもの)は、プロットとの一致がない。つまり、プロットの一部のみを取り上げて無理やり固定観念の方にあてはめてしまうので、プロットの一部は適合しても、プロットの残りの部分は適合しなくなる訳である。[Klopferは、24歳の単純型統合失調症者(simple schizophrenic)の例を挙げている。その人は10枚のカードにuterusと反応した。妄想も幻覚も、その他の二次的症候もない人であったが、他者にまったく関わらず、仕事にもつかなかった。]

③「器質性固執」(organic perseveration)は、例えば進行性の脳動脈硬化症のように器質性の脳損傷のある人が示すもの。統合失調症では自分の観念に固執して現実を無視するが、脳損傷では外的現実(ここではプロット)にひきずられる。

(4) 「選択的知覚」(selective perception)は神経症のなかのヒステリー者(hysteric)に見られる。「盲点を持った現実吟味」(a reality testing with blind spots)で、根底には抑圧(repression)ないし否認(denial)がある。一般に、性的な領域や攻撃的な領域が無視されることが多い。Klopferらの例では、最近性的パニックからやっと回復したある男性はカードVIに対して「動物の毛皮」という公共反応を与えたが、その毛皮には尾の部分がないと言う。カードの上部(D5)がしっぽに見えないかと問われると、彼は最初「そうかもしれない」と答えたが、結局、「そこは動物の毛皮とはまったく関係ない」と激しく主張した。

(5) 「過剰な正確さ」 (overaccuracy) は、強迫神経症者 (compulsive neurotic) に見られる。彼らの現実吟味は硬直的で、柔軟性がない。そのため、例えば「羽の裂けた蝶」といった反応となる。反応領域では dr が多くなる。強迫がひどくなると、正確さを求めるあまり、プロットの非常に小さい部分を選択する。吟味そのものは悪くはないが、内容は非創造的、単調かつ平凡なものとなる。

(6) 「こじつけ反応」 (far-fetched response) は、プロットに投与された概念の形体的特性はプロットと適合しているが、概念の構成要素の構成的な組み合わせが非現実的なものである。例えば、カードVIの上部 (D5) を「髭と翼を持った蛇」と言うものである。この場合、「翼を持った蛇」だけであればまだ許容できるが (実際「翼を持った蛇」はいろいろな神話においてかなり重要な役割を果たしている)、しかし、これに「髭」を付け加えたことは許容度を下げることになる。

(7) 「奇異反応」 (peculiar response) は、こじつけ反応よりも現実吟味力の障害がひどい。これは、例えばカードVに対して、「体の上下、羽の先から突き出ている4対の足を持ったコーモリ」といった反応をするもの。

(8) 「偏奇した反応」 (bizarre response) は、概念の構成成分とプロット素材との一貫性がまったく失われてしまうもの。奇異反応の場合には現実吟味の弛緩に対する反作用の努力が見られるが、この偏奇した反応では、そのような補償的な配慮はまったく見られない。現実吟味の障害は非常に病的なものである。

2. 解釈上の留意点—色彩障害を中心として

色彩に対する反応は、検査協力者が対人関係という情動的な刺激にどのように反応するかを示す。つまり、情動刺激 (emotional impulse) に対する実際的な処理の仕方を示す。これに対して、濃淡に対する反応は、情動の統合性の発達により基礎的な部分、つまり基本的安全感 (basic security) や愛情欲求 (他者の愛情を求める欲求) (need for affection, affectional need) と関係する。したがって、例えば色彩障害がまったくなくて濃淡にのみ障害があれば、これは、表面的な対人適応は良好であるが他者との深い感情的な触れ合いができないことを意味する。

(1) FCは、情動的衝撃 (emotional impact) に対する統制された敏活な反応を意味する (ただし、FC-は情動統制の崩壊を意味する)。CF はよい意味では自発性、悪い意味では不適切な統制を意味し、C は爆発的で統御できない情動性を示す。

FC と CF+C との比率を見た場合、FC が CF+C よりも多く、CF+C が2~3個あるときには、自己の衝動と情動をうまく統制することができることを示す。この場合しかし、CF+C が0かほとんどないときには、過剰統制となり、社会的環境に対する反応は表面的なものとなりがちである。FC よりも CF+C のほうが多いときには、情動的な衝撃に対する統制の弱化を示す。

(2) 色彩反応の合計 (Sum C) は、情動刺激に対する顕在的な反応性 (overt reactivity) の程度を示す (Sum C の計算式は $FC+2CF+3C$ を2で割る)。この Sum C が3よりも少ない場合には、環境からの影響性にほとんど反応しないことを意味する。色彩反応の完全な欠如は、対人適応の悪さを示す。神経症的うつ病では色彩反応はまったくない。ちなみに、カードVIII・IX・Xに対する反応のパーセンテージ (3枚のカードの合計反応数を総反

応数で割ったもの)は、環境からの情動刺激に対する一般的な応答性 (general responsiveness) を意味する。

Sum C と M との対比で言えば、Sum C が M の数よりも多いときには外向性 (extratension) (外部から動かされる人) を示す。極度の外向性は一般に、現実への逃避によって問題を解決しようとする試みを反映していると信じられている。逆に、M が Sum C よりも多いときには (M が 2 よりも多く、Sum C より多く、Sum C が 1 以上)、内向性 (introversion) (自己の内部から動かされる人) を示す。ちなみに、①思春期ならびに②30歳から35歳の頃という二つの時期には、個人内の内向-外交のバランスは内向の方向へと傾きがちである。

(3) 「色彩選択」 (color choosiness) は、より穏やかな色彩だけを選択的に用いたり、カードⅡ・Ⅲにおいて色彩領域に反応しなかったりするもの。この意味するところは、外界からの情動的な挑戦 (emotional challenge) に直面すると何らかの障害が生ずることである。その場合、情動的に巻き込まれるようになることをいやがることが見られる。

(4) 「色彩躊躇」 (color shyness) は、色彩を用いることを一般的にいやがる傾向である。これは、他者に対する情動的依存性が欠如していることを意味する。ただし、情動的な挑戦に直面して混乱することはない。

(5) 「色彩否定」 (color denial) は、色彩を使用していることを思わせるような反応を出す、しかし本人自身は色彩がその反応と何の関係もないと主張する。Klopper らの例によれば、ある39歳の高所恐怖の男性はカードⅢにおいて「真ん中の赤は bow tie のように見える」と述べ、質疑段階では「色を無視してですが」と言った。色彩否定は、情動刺激に対する「恐怖症の制止」 (phobic inhibition) を意味する。恐怖症に多い。

(6) 「色彩回避」 (color avoidance) は、色彩領域を用いることの失敗である。例えば、多彩色のカードⅧ・Ⅸ・Ⅹにおいて空白部ないし灰色領域のみに反応する。情動刺激を回避する傾向を示す。情動的挑戦を含む場面から撤退したいという願望を意味する。強迫神経症に多い。

(7) 「色彩無視」 (disregard for color) は、色彩領域を用いてはいるものの、色彩を使用していることを仄めかさなような反応を行うものである。これは色彩回避よりも統御が弱い。

(8) 「強制 FC」 (F↔C: Forced FC Combinations) は、事物が確定的形態を持ち、色彩はこじつけ的に使用される。したがって、使用された色彩はその事物の自然の色ではない。反応例は「人工的に赤く塗られたアザラシ」など。「自然な FC」 (natural FC) が円滑な応答性を意味しているのに比べると、F↔C は、努力した情動的応答性 (effortful emotional responsiveness) を示す。社会的関係における緊張、円滑な対人関係を維持することがうまくいかないこと、簡単な社会的技術を獲得することがうまくいかないことなどがその背景にある。

(9) 「恣意的FC」 (F/C: Arbitrary FC Combinations) では、色彩はただ単に部分を区別するためにのみ使用されている。例として、「色のついた地図」「色のついた解剖図」など(解剖図の場合、身体各部分の名称を指摘して、さらに色彩を使用していれば F/C。各部分は漠然としか述べられないまま色彩が使用されていれば、C/F となる)。意味的には、情動的衝撃に対して、本人自身の感情とは本質的に無関連な表面的・行動的なやり方で反応することを示す。その場の状況によって要求されていると本人自身が感じるような

やり方で反応する。ただし、F/C がたった1つで、しかもカードⅧに対して与えられている場合には、上記のことはあてはまらない。

F/CとC/Fとの違いは、統御の量の違いである。C/F は成功的な統御のない表面性を示す。

F/C-は時折、自分が正常に振る舞っていると考えている精神病者に生ずる。

(10) 「色彩命名」 (Cn: Color Naming) は、カードの色の名前や色合いについて述べるもの。この場合、単なる注釈 (remark) でなくて、反応でなければならない。Cn の後ではよい反応は出てこない。情動的場面を魔術的な方法によって取り扱おうとする成功していない試みを示す。幼児以外では、知的障害や精神病の成人に見られる。本人にとって外界は脅威的で、しかもその外界を操作するには無力であり、情動的に反応するように強いられている。そこで、Cn という表面的な処理様式 (名づけることによるコントロール) がとられる。それによって本人は、耐えられない状況を自分が取り扱っているという幻想を抱く。

(11) 「偏奇した色彩反応」 (bizarre color response) は、色彩カードに対して偏奇した異様な反応を与えるもの。例えば、ある40歳の男性統合失調症者はカードⅨに対して、自由反応段階では「お母さんにセックスして苦しんでいるときの夢」と反応。質疑段階では、「このへん (D9) はお母さんの下半身の肉体で、青いところはぼくの肉体。ここでセックスしている。上から、両側から、暗闇の、ここから悪魔に唆されてセックスを無理矢理やらされている夢。(お母さんの下半身というのは?) 赤いから。実際こういう夢を見た。ここまで赤くはなかったが、肉体じゃないかと思う。(青いところは?) ぼくはまだ若いし、青年だから青い。(セックスについて) このへんがセックス。ここにペニスがある。ここ、お母さんの膣。まだ完全にセックスしていない。近くまで行っているよう。(悪魔は?) 上から押さえつけるような、覆い被さったような感じ。このへん (D8)、仏様の感じ。真ん中は仏様がかすんで見えているような感じ。(仏様とは?) 丸くなっていて、このへん仏様の頭じゃないかと思う。(仏様は何か関係していますか?) ぼくが母とセックスしているのを、遠くのほうから見守っているんじゃないかと思えます。(悪魔のほうは?) 悪魔は、色がこんな色は悪魔の色じゃないかと思う。上のほうから押さえつけるよう。無理に母とセックスさせるよう」と答えた。この場合、「かすんで見える丸い頭の仏様」についてはプロットの特性と一応合致しているので思考障害のなかの奇異反応の要素があるが、しかし反応全体を見た場合にはやはり偏奇した反応に入る。

(12) 「未熟色彩反応」 (C: Crude C) は、カードⅡ・Ⅲの赤色部に対して同じように「血」と答えたり、例えばてんかん患者がカードⅧ・Ⅸ・Ⅹの青色部に対してすべて「水」と答えたりするもの。このように、事物の自然の色が常套的に、決まり文句のように答えられる。形態的要素はまったくない。爆発的で、統制されない情動を示す。しばしば病的なサインとなる。C や Cn は幼児・統合失調症・器質的障害などに現れる。[C、つまり形態的要素のまったくない純粹色彩反応 (pure C) は、概念的には通常の C とここで言う未熟色彩反応の二つに分けられるが、スコアリング上の表記はすべて C となる。]

(13) 「色彩叙述」 (Cdes: Color Description) は、カードの色彩を叙述するもの。例えば「中央の緑が上のオレンジのなかに入り込み、下の桃色と混ざり合っている。たぶん、水彩画の習作でしょう」といったもの。単なる色彩命名ではなくて、色彩の芸術的性質が述べられる。注釈ではなくて、反応でなければならない。情動的な場面に対する強い知的な把握の仕方を示す。F% の高い人が感じないことによって統御するのに比べると、Cdes の

人は、自分がいかに感じているかを人に表さないことによって情動刺激を統御する。

(14) 「色彩象徴」(Csym: Color Symbolism)は、「春と再生の色です」「下の緑は、ねたみを表しています」など。意味的には Cdes と同じであるが、Csym は、より知的でより理論的な努力を示す。なお、Cdes も Csym も情動的衝撃によって強く動かされ、制御の困難さを感じてはいるが、なんとか制御に成功している状態を示す。ちなみに、Klopper 法における sym の系列は、FCsym, CFsym, Csym, Fcsym, cfsym, csym, Msym, Ksym など多彩である。(片口法でのスコアリングは Csym のみである。したがって、Klopper 法における FCsym や CFsym は、片口法では形態の関与の度合いに応じて、「FC、Csym」ないし「CF、Csym」となる。また、片口法では、C'sym は特に取らないで、C' のなかに含める。)

3. 解釈上の留意点—濃淡障害を中心として

色彩反応が情緒の実際的な働きを示すものであるとすれば、濃淡反応は、情動の統合性(emotional integrity)が発達するための基礎的な潜在力、つまり基本的安全感(basic security)を示す。より具体的に言えば、濃淡反応は人が自分の愛情欲求をどのように体制化しているかを示す。したがって、色彩障害よりも濃淡障害の方が障害は重く、予後は悪くなる。

(1) 濃淡の質として、①柔らかい濃淡反応は、愛情欲求を受容的に認知していることを意味し、②硬い濃淡反応は、愛情欲求を懐疑的に見ていることを意味している。

(2) $Fc \rightarrow cF \rightarrow c$ となるにつれて、愛情欲求は未成熟かつ統御できにくいものとなる。Fc の場合、未成熟な接触への欲望はうまく統御され、洗練されている。ただし、Fc の数が多すぎるときには、他者の愛情に対して過度に依存しすぎるか、非常に多くの人々からの反応を求めたい欲求があるか、それともこれら両者であることを示唆している。逆に、Fc の数が少なかったり欠如していたりする場合、もしも濃淡が回避・拒否されているときには愛情欲求の受容もしくは自覚がなされていないことを意味し、もしも濃淡感受性が認められないときには愛情欲求への潜在力が欠けていることを意味している。形態要素のまったくない c は幼児的で未分化かつ粗野な愛情欲求を示しており、これは本質的には身体的接触の一変形である。[片口法では Fc をもつばら感受性の繊細さや傷つきやすさと結びつける。数個の Fc の存在は適度の繊細さと敏感さを反映するが、多量の Fc は過敏で不安定な人柄を示す。]

ちなみに、KとKFは漠然とした不安感を意味しており、愛情欲求の満足に関する欲求不満状態を示している。FKは不安の客観化・対象化を意味する。一方、Fk、kF、kは知性化によって覆い隠そうとしている愛情欲求に関する不安(affectional anxiety)の存在を意味する。FkはkFやkに比べて、その不安を知的なやり方によってよりよく統制しうることを意味する。

(3) 「濃淡感受性欠如」(shading insensitivity)は、濃淡に対してまったく何の反応も示さないもの。つまり、自由反応段階でも質疑段階でも、濃淡が関係していると予想される「毛皮」などの反応をまったく出さないもの。これは、人生初期の愛情剥奪経験か愛情欲求の長期の抑圧を意味する。基本的安全感の大きい歪みを意味し、心理療法の予後はよくない。

(4) 「濃淡否認」(shading denial)は、例えばカードVIに対して「毛皮」と反応する

ものの、限界吟味段階において「濃淡は関係ありません。形だけです」といった具合に、濃淡の使用を否定するもの。これは防衛的反応である。その背後には、愛情欲求を受容することについての意識的葛藤が存在する。

(5) 「濃淡回避」(shading evasion)は、濃淡反応をしても顕著な濃淡部分を避けて周辺部にのみ反応したり、濃淡を使用したことを認めるのをしぶったり、非常に漠然とした濃淡反応を示したりするものである。愛情欲求の認知はあるが、それを受容することに関して回避的であるため、心理療法において深い関係を持つことがむずかしくなる。なお、「自我の強さ」(ego strength) (自我機能の働きの健全さの度合い) から見た場合、濃淡回避よりも濃淡否認のほうにより自我の強さが認められる。

(6) 色彩反応にまったく障害がなくて濃淡に大きい障害が見られるときには、表面的な適応を保ってはいるが深い情緒的な接触を欠く分裂性気質の傾向を意味する。社会的・経済的に成功している人も少なくない。

(7) $Fc+c+C'$ と $FC+CF+C$ との比率は次の3つの場合に分けられる。① $(Fc+c+C') > 2(FC+CF+C)$ の場合、「火傷した子ども」(burnt child)。外界からの刺激に対する応答性は「何らかの心的外傷体験」(some kind of traumatic experience)によって妨害され、その結果、引きこもり(withdrawal)が生じている。他者からの愛情反応を求める欲求が非常に強いので、傷つけられることへの恐怖ないし拒否されることへの恐怖から、他者に対する顕在的反応(overt response)が制止されている。他者との情動的接触に対する過度の警戒心がある。② $(Fc+cF+C') = 1/2(FC+CF+C)$ の場合、情動的な状況に対する自然な応答性が見られ、社会的な環境と相互交流する能力があることを示している。③ $(Fc+cF+C') < 1/2(FC+CF+C)$ の場合、情動を行動化(acting out)する傾向を意味する。特に、 $CF+C$ が FC よりも多く、形態水準が悪く、 M が少なく、しかも色彩反応の内容が攻撃的なもの(血・喧嘩・戦争など)である場合には要注意となる。本人自身は賞賛や愛情を求める欲求をほとんど感じていない。

(8) 「不成功な昇華」(abortive sublimation)は、濃淡部(無彩色領域)に色彩感覚を投射として意味づけるもので、例えばカードVに対して「黄色いチョウ」と反応する。これは、本当は自分が他者から愛されたいという愛情欲求を抑圧もしくは他者に投射して、本人自身は、自分は自己犠牲的に他者のために尽くすのだというふうに信じ込んでいることを意味する。特に投射は逆転の機制の1つであり、投射が発動すると、自分ではなくて他者(相手)のほうが強い愛情欲求を有しているというふうに本人は思いこんでしまう。結局、本人の愛情欲求は錯覚に基づいた積極的な動機づけ(illusory positive motivation)にすり替えられており、それだけ心理療法はむずかしくなる。[片口法においては、この濃淡を色彩として用いる反応はPiotrowski(1957)が提唱する C_p (彩色投射反応: color projection)として記号化される。 C_p には、 FC_p 、 C_pF 、 C_p の3つがある(これら3つはクロッパー法では、 FC' 、 $C'F$ 、 C' となる)。 C_p の意味としては、本当は抑うつ的で泣きたい気分なのであるが、表面上は明朗さを示すといったものである。]

(9) $FK+Fc$ と F の比率には3つの場合がある。① $(FK+Fc) > 3/4F$ では、愛情欲求と他者からの反応への欲求が強すぎる。② $(FK+Fc) = 1/4$ to $3/4F$ では、愛情欲求は良好に発達している。③ $(FK+Fc) < 1/4F$ では、愛情欲求の否認、抑圧ないし未発達といった傾向がうかがわれる。

4. 継起分析の留意点

継起分析 (sequence analysis) はカード間分析 (card-to-card analysis) と反応間分析 (response-to-response analysis) より成る。

(1) 継起分析を行う場合、一般的には次のようなことに注意する。①各カードにおいて典型的に生ずる反応がどのようなものなのかを把握しておく。②各カードにおける反応数に注意する。③各カードにおいて、反応決定因がどのように継起するか注意到する。④初発反応時間や反応時間がカードごとにどのように変化するか注意到する。そのさい、反応領域や反応決定因、反応内容との関連に注意する。⑤色彩カードにおけるいわゆる「色彩ショック」(color shock) や、特にカードⅣとⅥにおける「濃淡ショック」(shading shock) の存在に注意する。⑥カード間ならびに反応間の形態水準の変化に注意する。⑦自由反応段階におけるデータと、質疑段階や限界吟味段階におけるデータとを比較する。

(2) 各カードに対する最初の反応は重要である。ここでカードⅠを例に取ると、①最初に良形態の M を見る人は、独創的で良好な知能の持ち主。ただし、一般的な筋から外れた思考をする場合がある。②「コーモリ」「ガ」「チョウ」といった公共反応を見る人は、多くの人たちと共通した見方ができる人。③「顔」を見る人は、「概念優位」(concept dominant) の人。言い換えれば、観念的、つまり自己の内的な idea が先行する人、あるいは自分の内的な想念によって影響されやすい人である。なお、単なる「人の顔」よりも、「人の顔。こいつが私をジロツと見ている」の方が概念優位の度合いは高くなる(このような M は妄想型の統合失調症の可能性がある)。④「カードのここにスジが見える」と言う人は「刺激優位」(stimulus dominant) の人。つまり、カード上のプロットの持つ刺激特性に縛られてしまい、自由な反応をうまく産出することができない。知的障害や脳損傷などに生じやすい。

(3) カードⅡは最初の色彩カードであり、しかもどぎつい赤色が用いられている。検査協力者がこの赤色をどのように処理するかが重要となる。一般的に言えば、①通常の適応水準にある人は適度に赤色を無視して、「熊」とか「人間」といった公共反応を見る。しかし、情動の統合性に優れた人は、「酔っぱらって赤い顔をした人」とか、「赤い化粧と、赤玉の入った衣装をつけたピエロ」などを見る。この場合、検査協力者は赤色を排除しないで、反応全体のなかにうまく(無理なく)統合している。②神経症水準の人は赤色によって攻撃的・破壊的な情動が誘発されやすいので、プロットに「飛び散った血」を見たり、「喧嘩して顔が血だらけになっている人」を見たりする。なお、ここで言う「水準」とは自我の機能水準のことで、これは必ずしも病名と対応しない。例えば、統合失調症でも病から回復してくるとテスト上は神経症水準に近くなる。③精神病水準になると、現実吟味がひどく障害されるので、例えば「全体が腐った内臓で、血が滲んでいる」といった反応をしよう。ただし、以上のことはあくまでも一般的な傾向性であって、個人差が激しい。また、同一の個人によっても病勢によって異なってくるので注意する。

(4) カードⅡ・ⅢよりもカードⅧ・Ⅸ・Ⅹ(多彩色カード)において障害を示す検査協力者もいる。このような人は、情動の強さと生活環境との間に葛藤がある。つまり、彼らの生活環境は、彼らの強い情動的欲求の適切なはげ口を提供しないのである。

(5) 反応間の継起として、最初の反応の次の反応にも注目する。例えば、カードⅠに対する最初の反応で形態水準が低下していたら、次の反応で形態水準が回復するかどうかに

注目する（もしも低下していた形態水準が回復してくれば、それだけ自我機能の働き方は健全であると言えよう）。

継起を見ていくのは反応決定因についても同様である。例えば、あるカードに対する最初の反応が F で、あとになるにつれて M や Fc などが出現するような場合、検査協力者の抑制された統御が慣れるにしたがって軽減していくことがうかがわれよう。

おわりに

本論文ではもっぱら思考障害・色彩障害・濃淡障害に焦点をあてて、クロッパ―法における解釈上の留意点について述べた。クロッパ―法の反応分類や比率、それらに対応する解釈仮説はなかなか複雑であるが、われわれ臨床心理士がインテイク面接や心理療法面接を行ったりする場合に参考となることが少なくないので、臨床心理士の資格取得を目指す大学院生としては、クロッパ―法に通じておくことも大切ではないかと思われる。

文献

- Exner, J. E. (2003) : *The Rorschach: A comprehensive system, basic foundations and principles of interpretation, volume. 1. Fourth Edition.* John Wiley & Sons, Inc.
(中村紀子・野田昌道監訳, 2009, ロールシャッハ・テスト—包括システムの基礎と解釈の原理, 金剛出版)
- 片口安史 (1987) : 新・心理診断法. 金子書房.
- 河合隼雄 (1969) : 臨床場面におけるロールシャッハ法. 岩崎学術出版社.
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G. & Holt, R. R. (1954) : *Developments in the Rorschach Technique. Volume 1. Technique and Theory.* New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Anderson, D. V., Baker, G., Bolgar, H., Fox, J., Hallowell, A. I., Higham, E., Kellman, S., Klopfer, W. G., Meili-Dworetzki, G., Shneidman, E. S., Snowden, R. F., Spiegelman, E. S., Stein, M. D., Troup, E. & Williams, G. (1956) : *Developments in the Rorschach Technique. Volume 2. Fields of application.* New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Klopfer, B. & Davidson, H. H. (1962) : *The Rorschach Technique: An introductory manual.* New York: Harcourt, Brace & World, Inc. (河合隼雄訳, 1964, ロールシャッハ・テクニック入門, ダイヤモンド社)
- 名島潤慈 (1974) : 分裂病者における自我機能と自己概念に関する一研究. 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄 (昭和48年度), 118-121.
- 名島潤慈・恒吉徹三 (2000) : ロールシャッハテストにおけるスコアリング上の留意点. 山口大学教育学部研究論叢, 50, 第3部, 21-36.
- Piotrowski, Z. A. (1957) : *Perceptanalysis.* New York : The Macmillan Company. (上芝功博訳, 1980, 知覚分析—ロールシャッハ法の体系的展開, 新曜社)